

観光・環境・生活 —フィリピン・ボラカイ島の観光文化に関する予備的考察—

Tourism, Environment, and Life: A Preliminary Study of Tourism Culture in
Boracay Island in the Philippines

東 賢太郎

フィリピン・ボラカイ島は、美しいホワイトビーチが世界的に知られる観光リゾート地である。本稿では、今後のボラカイ島の観光文化に関する研究への予備的考察として、観光と環境、および観光と生活のそれぞれの関係性に注目する。フィールドワークによって得た資料や情報から、観光化や観光開発による環境の喪失という齟齬が生まれていること、また観光圏と生活圏が地理的かつ機能的に分化しながらアクターの往来によってコンタクトゾーンが生起していることを明らかにする。その上で、生活環境主義における「居住者の生活の便宜」について考察を行う。

キーワード：観光、生活環境主義、コンタクトゾーン、フィリピン、ボラカイ島

目 次

- I はじめに
- II 先行研究
- III 環境の喪失
- IV 観光圏と生活圏
- V コンタクトゾーンとしての観光
- VI おわりに

I はじめに

本稿は、フィリピン・ボラカイ島における観光文化について、今後の研究の方向性や展開を提示するための予備的考察という位置づけである。ここ数年来継続しているボラカイ島でのフィールドワーク¹によって得た資料をもとに、同地域における観光文化という広く漠としたテーマに対し

て、有効な視座を確保し具体的に取り組んでいくべきポイントをいくつか示しておきたい。その前に、「観光文化」をある程度定義しておくとするれば、「再帰的近代において生起する観光と文化の複雑で捻じれた関係の諸相」であるとでもいえようか²。そのように曖昧かつ暫定的に設定した定義を、現場の具体的事象から一つ一つ解きほぐしていきたいというのが、私の現段階における観光文化研究の構想である。

フィリピン・ボラカイ島は西ビサヤ地方 (Region VI)、パナイ島の北側に位置している。行政区分ではア克兰州のマライ町に属し、島内にはヤパック、バラバグ、マノック・マノックの3つの村がある³。フィリピンの首都マニラからの距離は200kmほどであり、飛行機であればマニラから対岸のカティックラン空港まで約1時間、そこから10分ほど船に乗ると島の港に到着する。ボラカイ島は、世界的に知られる観光リゾート地であり、とくに島の西側にある全長4kmのホワイトビーチを中心に観光化が進んでいる。島内の人口は12,000人ほど (2000年国勢調査) だが、年間の観光客数は60万人を超え、その中でも外国人観光客が約20万人と多くを占めている。

以下、本稿の議論に関連する先行研究を概観した後、ボラカイ島の観光と環境、および生活とのかかわりに関する論点をそれぞれ提示し、最後に今後の研究への視座と展望を素描する。

II 先行研究

まず、本稿の調査地であるボラカイ島について、観光ガイドブック等を除いては、文化や社会的な側面を扱った学術的な研究は管見の及ぶ限り非常に少ない。その中でも、マーゴスによる研究は、90年代前半のボラカイ島での現地調査に基づき、漁業と儀礼、そして観光についてなされた報告である。その中ではすでに、観光化によって住民の世界観が変化しつつあるという記述がみられる [Magos 1994: 347-349]。本稿も同じく、観光という近代のかつグローバルな現象がボラカイ島に与え続けているインパクトと変化に注目するという点で、マーゴスの視点を共有するものである。

次に、本稿の大きなテーマである観光と文化の関係については、観光人類学を中心に多くの研究がなされている [山下 2007など]。その中でも観光と環境、また観光と生活のそれぞれのかかわりは、観光文化の重要なトピックとして取り扱われている。例えば、マスツーリズム批判の文脈におけるエコツーリズムや持続可能な観光開発は、観光資源としての自然・生態環境の保全を考える上で重要な議論である [橋本・佐藤 2003]。また、ボラカイ島と同じく有名なビーチリゾートであるバリ島の事例では、観光化や観光開発と住民の生活を切り離そうとする政策や、逆に村落生活自体を観光化する「総合観光村」という持続可能な観光開発の試みが行われている [山下 1999]。そこにおいては、観光が与えるインパクトのうち、環境破壊や生活侵害というネガティブなダメージとのせめぎ合いのプロセスで、観光文化が新たに生成する様相が注目されているのである。

最後に、観光、環境、生活という本稿のキーワードを接合する理論的な視座として、「生活環境

主義」[松田 1989, 古川・松田 2003] を紹介しておきたい。生活環境主義とは、生態系や地球環境を見通した環境保全の立場ではなく、居住者の生活システムの保全を第一として環境問題に対処する立場である。そこにおいては、居住者の生活の便宜が最優先されるために、ときにローカルな環境保全の論理が優先され、またときには環境の破壊にもつながる積極的な介入が選択される。観光というプラスにもマイナスにもなりうる両義的な外部要因による社会変動に対して、この生活環境主義は強力な理論的支柱となりうるだろう。生活システム最優先という前提のもと、ときに観光化に対して強い抵抗を示し、ときに積極的に観光開発を推し進めるような日和見とも受け取れる実践を肯定的に説明できるからである。だが、観光というアリーナにおいて、生活環境主義がさらに鍛えられる必要があるということをここでは指摘しておきたい。まず生活システムの保全という大前提自体が、近代化とグローバル化の大きな流れの中で生起する観光化においては崩壊してしまうかもしれないということ。いったいそれが生活の便宜であるのか、それとも観光開発のための便宜であるのか、識別不能な状況において環境破壊や生活侵害が進行していくような状況は、観光という文脈においては頻繁にみられるからである。つまり、観光と環境、そして生活の各システムが相互に乗り入れる状況が発生しているのである。さらにもう一点、生活環境主義の重視する居住者という立場に関して、観光という領域では、はたして一体誰が居住者であるのかを見定めることが非常に難しい。グローバル化の特徴である移動の活発化によって、地元住民と外来者、あるいはホストとゲストの区分が限りなく不明瞭になってしまっているのである。居住者といった場合、ローカルな住民であっても観光産業に関わるものとそうでないものがあり、また国内外への移住によって居住者が居住者でなくなる場合も多い。次に、外来者にも観光産業従事者と非従事者があり、また移住者や長期滞在者もいれば短期間の訪問者もいる。このように多様なアクターが頻繁に活発に移動と定住を繰り返す観光地において、居住者とは、あるいは当事者とは一体誰であるのか、生活環境主義は応答する必要があるだろう。以上2点を再検討する余地を残しつつ、本稿の研究視座は大きく生活環境主義によるものであるということを、ここに明示しておく。

III 環境の喪失

観光と環境が密接に関連した2つの事象であるということは、先述のエコツーリズムや持続可能な観光開発についての議論からも明らかである。そして、ボラカイ島においても、継続的に行われている観光開発は島の環境に大きな影響を与えている。中でも、ボラカイ島の観光と環境の関係について本稿でとくに注目したいのは、それが「常に失われ続けている」という言説についてである。

私が初めてフィリピンに滞在した98年当時、ボラカイ島はすでに有名なビーチリゾートとして知られており、フィリピン人たちから「ボラカイにはもう行ったか？」という問いかけをよくされ

た。「まだだ」と答えると、必ずため息混じりにボラカイの美しさを褒めたたえ、私にぜひ行くようにと強く勧めるのである。しかしながら同時に、当時から「ボラカイはもう汚染されてしまった」という語りも頻繁に聞かれた。ビーチリゾートとして観光開発が進むことにより、島の自然環境が大きなダメージを受けてしまったというのである。元々、欧米のバックパッカーたちによって70年代ごろから秘境として知られていた島は、90年代にメディアに取り上げられることにより、世界的な知名度を獲得した。そのころから環境汚染は加速度的に進み、98年時点ですでに環境NGOによる深刻な汚染被害の報告がなされていた。手付かずの楽園リゾートは、大挙して押しかける観光客とそれに応じた観光開発によって失われてしまったのである。

興味深いのは、90年代後半以降、現在に至るまで汚染言説は一貫して継続しているということである。年々観光客数は増加しているので環境汚染が進行するのは自然なことにも思われるが、その言説に特徴的なのは観光客が大挙して押しかける以前の状態と対照される語り口である。例えば、ボラカイ島に在住するフィリピン人への聞き取りからは、大規模な観光化が進む以前の「何もなかった昔」の時代がノスタルジックに語られ、インフラの整備が進み観光客でにぎわう島の現状への両義的な態度がみられた。また古くからボラカイを知る外国人滞在者やリピーター観光客は、「私が初めてボラカイに来た頃は…」という回顧的な枕詞とともに、その当時いかに電気や水道などが不便であったか、レストランやホテルなどの数が少なかったかを語り、ボラカイの観光地化が進行した現在の状況と比較する傾向にある。その上で、当時の海中や夜空の美しさを思い起こし、まだボラカイが秘境だった頃、手付かずの自然が残っていた頃を懐かしむのである。

ボラカイ島における環境の喪失は、現状を一見してわかるものではない。ホワイトビーチ沿いを歩けば、海は青く浜は白い。夕方の日没時になれば、美しい夕日が海に沈む様子を見ることができる。また島には高い建物の建築制限があり、近年急速に開発が進んだといっても、マニラやセブなど都市部と比べれば豊かな自然を感じられる。現状を喪失であると認識するためには、あくまでも手付かずの秘境時代と比較する必要があるのである。

そのような90年代以降継続するボラカイ島の環境汚染言説は、観光開発による実際の被害の大きさを物語ると同時に、決して繰り返すことのない秘境の楽園時代を欲望しながら繰り返される現在の観光地化によるダメージへのクレームとしても機能している。またそのダメージは、観光地ボラカイ島におけるホスト側である住民や観光産業従事者にとっても、またゲスト側の長期滞在者やリピーターにとっても、立場は違えども同じく喪失であると捉えられている。環境へのダメージという観点から見た場合、ボラカイ島における観光化や観光開発は、かならずマイナス要因である。一度動き出してしまった観光化と、それによる環境の変化はけっしてもとに戻すことはできない。それゆえボラカイ島は、「常に失われ続けている」のである。

それでは、そのような語りは具体的に何の喪失を嘆き、何へのダメージに憤っているのだろうか。まず考えられるのは、やはり大規模な観光開発が行われる以前のボラカイ島へのノスタルジアである。少数の地域住民だけが暮らし、限られた旅行者のみが恵みを楽しむことができた時

代。電気も水道も通っておらず、ホテルもショッピングセンターもなかった時代。そして、それはもはや決して手に入れることはできない。次に、現在では島内の大きな収入源や雇用先となった観光の重要な資源としての自然環境の喪失である。例えば海水が汚染され泳げなくなったり、スキューバダイビング中に観察することのできる水中生物の数が減ることは、ホスト側にとってはビジネスへの打撃、ゲスト側にとっては楽しみの縮減として直接の影響を与えることになる。この場合、観光自体が否定されているのではなく、あくまで観光を持続可能なものにするために自然環境を資源として保護・保全するべきだという主張が込められている。観光開発か環境保全かの二者択一ではなく、両者を両立させるか、少なくとも環境の破壊や汚染を最小限にとどめることが望まれているのである。そして最後に、観光開発による環境汚染が生活を侵害するという危機感と憤りである。秘境時代へのノスタルジアも観光資源としての環境も、どちらもホスト側とゲスト側の双方にとっての「喪失」でありえるのだが、この生活侵害としての環境汚染に関しては、少なくとも生活に支障が生じると感じられる程度の長期滞在者でなければ、当事者として「喪失」を感じることはない。ホテルやレストランの排水による水質の汚染や観光客の増加によるゴミ処理問題など、観光化や観光開発は自然や生態系に影響を与えるだけではなく、生活環境を衛生的に劣化させている。ここにおいて、観光開発による環境問題が生活とも関わり、当事者の生活の便宜が問われることになるのである。

IV 観光圏と生活圏

次に、ボラカイ島における観光と生活のすみ分けや境界について考えてみたい。この場合の生活とは、観光産業に従事するものもしないものも含む島内住民、また国内や海外からの移住者や長期滞在者、そして短期訪問の観光客まで全てのアクターによる衣食住を中心とした日常の営みを含む。生活は観光の基盤でありながら、先述の環境問題のように観光化や観光開発と齟齬をきたすこともある。では、ボラカイ島というロケーションにおいて観光と生活はどのような距離感にあり、またどのように接触しているのであろうか。

ボラカイ島の観光は、島の西側4kmにわたるホワイトビーチを中心に展開している。世界でも有数の白砂のビーチに沿って、ビーチロードとよばれる白砂の道が伸びている。ビーチロードの両端には、ココヤシとともに大小の飲食店やみやげ物屋、宿泊施設やサービス施設が立ち並び、シーズンのオンオフを問わず観光客でにぎわっている。わずかにベディキャブ（自転車で引く人力車）が乗客を乗せて通ったり、警察や行政の自動車が必要時に通行することを除いては、ビーチロードでの移動手段は基本的に徒歩である。ビーチロードを歩くことは、目的地へとむかう移動であると同時に、ホワイトビーチとココヤシを視界に入れながら楽園リゾート的な風景を楽しみ、また飲食店やショップをひやかす観光アトラクションの一部でもある。さらに、ホスト側にとっては、ビーチロードは観光客に物を売ったり店へと呼び込んだり、また観光アトラクションへの客引

きをおこなう営業の場でもある。

一方、当然ながらボラカイ島にも観光以外の生活領域は存在する。例えば通勤通学や、食料品、生活雑貨、日用品などの生活必需品の販売、各種ビジネスやサービス、また居住など、観光と直接かかわりの薄い生活領域における活動は、ビーチロードを中心とした観光エリアではあまり見かけることができない。それらは島内の各地に散在しているが、特にメインロードとよばれる通りには生活関連の施設が多くみられる。メインロードは、ホワイトビーチから島の内陸部に少し入ったところをビーチロードと並行に走っている。道の両端には、リゾート・ホテルやレストランなど観光客をおもに対象とした施設もみられるが、多くは在住者が日常生活の中で利用する商売やサービス関連の建物である。道路は舗装されており自動車やモーターバイク、トライシクル(モーターバイクの横に乗客用のサイドカーを付けたもの)などが頻繁に行きかい、夕方になると渋滞すら生じることがある。

ホワイトビーチやビーチロードという観光中心地からわずか数分歩いた場所に、生活関連施設が立ち並ぶメインロードがある。この2つのエリアを便宜的にボラカイ島の「観光圏」と「生活圏」として設定し、その対照をさらに詳しく確認してみたい。表1と表2は、2007年8月に実施したビーチロードとメインロードそれぞれの両端にある店舗の種類と数をカウントした結果である⁴。表1はビーチロードで確認できた店舗の種類と数に対して、メインロードの店舗数を併記し比較

表1 ビーチロードとメインロードの店舗比較

店舗の種類	ビーチロード	メインロード
飲食	47	14
宿泊	35	12
おみやげ	31	1
ダイビングショップ	28	0
生活雑貨	12	74
マッサージ、スパ	8	1
不動産	4	1
マリニアクティビティ	3	0
銀行	2	4
両替	1	5
携帯電話	1	4
インターネット	1	1
カラオケ	1	1
タトゥー	1	0
ショッピングセンター	1	0
市場	1	0
ツーリストセンター	1	0

したもの、表2はメインロードのみで確認できた店舗の種類と数を示した内容である。表から一見して、ビーチロードには飲食や宿泊、おみやげ、ダイビングショップなど観光関連の店舗が多く、メインロードでは日用品を扱う生活雑貨の店舗や、事務所や病院、学校など生活に不可欠な施設が大部分を占めるというコントラストが明らかである。このことから、生活圏と観光圏は地理的にだけではなく、機能的にも分化していると考えられるだろう。

表2 メインロードの店舗の種類と数 (ビーチロードには無かった種類の店舗のみ)

店舗の種類	メインロード
事務所	11
病院	10
ガソリン	4
学校	3
理容	3
スーパー	2
旅行会社	2
倉庫	2
行政機関	2
竹屋	1
建築材	1
バイク	1
アパート	1
自転車	1
郵便	1
電話会社	1
ショークラブ	1
印刷	1
機械修理	1
ヘルスセンター	1
鍵	1
漫画喫茶	1
クリーニング	1
薬局	1
コピー	1
水	1

V コンタクトゾーンとしての観光

先述のように、ボラカイ島の生活圏と観光圏の地理的および機能的な分化が確認できる一方で、その2つのゾーンが接触したり乗り入れたりしている状況がみられることも指摘しておく必要がある。とくに、そのような状況は、ホストとゲスト双方のアクターが生活圏と観光圏を行き来するなかで発生することが多い。例えば、ビーチロードとメインロードの間に位置する市場、ディータリパパ(D'Talipapa)では野菜や肉、魚介類などの食材や日用雑貨などが売られているが、その客層にはホストとゲストの双方が含まれている。ホスト側にとって、ディータリパパは島内の完全にローカルで小規模な市場や商店に比べやや割高であるが品揃えや品質が良いために、ゲスト側にとってはメインロードで行商人や物売りが売るフルーツや魚に比べ値段が安いために利用される。また、市場での食材や日用品の購入は、本来は生活の領域に属する活動であると考えられるが、ゲストにとっては、市場に並べられた熱帯の魚介類を物色しながら値段交渉をしつつ購入するまでのプロセス自体を楽しむ観光的な要素も含まれている。同様に、メインロードに散在する食堂についても、それが地理的かつ機能的に生活圏に属するものでありながら、観光圏ともなりうる場合がある。ローカルな食堂はおもに、ホスト側をターゲットとして営業されており、観光客向けのレストランよりも大幅に安価でシンプルかつ日常的な食事を提供している。しかし、ビーチロード沿いの観光エリアにあるシーフードレストランや各国料理に飽きた観光客が、「ローカルなものが食べてみたい」と食堂に行き、注文から食事、支払いまでのローカルなプロセスをアトラクションとして楽しむような状況は頻繁にみられる。

観光圏が生活圏へと乗り入れる状況に対して、逆に観光圏が生活圏化するような状況もありうる。例えば、ダイビングショップが所有するボートは、ダイバーを潜水ポイントまで連れて行ったり、ダイビング中の基地になる観光のための道具である。しかし、ボートは盗難やいたずらの恐れがあるため夜中の見張りを立てねばならず、多くのダイビングショップではフィリピン人のボートマンに船内で寝泊りすることを義務化している。あるボートマンが、ショップの日本人オーナーに退職を申し出たとき、その理由は近々結婚するため妻の待つ家に毎晩帰る必要があり、毎晩のボートでの寝泊りは不可能だからというものであった。このエピソードは、観光の領域に帰宅や寝泊りという生活上の都合や必要性が分かち難く埋め込まれていることを示している。ホストであっても生活者である以上、生活の便宜を完全に切り捨てて観光に従事することは不可能である。しかし逆に、観光業に従事しているということは、生活自体が観光の領域に包摂されていると考えることもできるかもしれない。そこでは、観光圏の生活圏化と生活圏の観光圏化が同時に進行しているのである。

このように、地理的かつ機能的にはある程度分化した生活圏と観光圏が、ホストとゲストによる2つのゾーンの往来によって境界が曖昧になってしまう状況から、さらに観光におけるホストとゲストという二分法自体の有効性を疑ってみることも可能であるかもしれない。例えば、ボラカ

イ在住のフィリピン人であっても、観光業に従事している場合とそうでない場合、またボラカイ出身である場合とそうでない場合で、観光におけるホスト的な役割や責任の度合いはかなり異なる。あるいは、日系ダイビングショップの日本人インストラクターは、ショップのゲストである日本人ダイバーに対しては完全にホストであるのに対して、フィリピン人のスタッフにとっては同僚でありながら一定期間のみ滞在する外国人としてゲスト的に認知されることもある。ローカルのホストと外来のゲストというシンプルな二分法的発想では、観光地における多様かつ多元的な関係性を適切に把握することはできないだろう。

生活圏と観光圏、ホストとゲスト、さらにはローカルとナショナルやグローバルという様々な境界が、ボラカイ島の観光においては曖昧なものとなっている。このことは、これら二分法を観光文化の研究に無批判に適用する限界を浮かび上がらせるとともに、むしろ複数の領域が相互に乗り入れ、葛藤をはらみつつも共存する中に、観光文化が創出されるプロセスに重心を移す必要性を喚起しているのではないだろうか。コンタクトゾーンとしての観光を考えることは、あれかこれかの二分法ではなく、またどちらか一方による支配や強制、抑圧でもなく、弁証法的な相互行為の中に創造性を見出すことでもある。もちろん、その創造が常にポジティブな帰結を導くわけではないことには注意する必要があるが。

VI おわりに

以上、本稿ではフィリピン・ボラカイ島の観光と環境、そして生活の関係についてみてきた。先行研究にみられるように、ボラカイ島においても観光化や観光開発は、環境や生活との関係において様々な問題を引き起こしつつ、新たな状況を生み出していた。

島の環境が「常に失われ続けている」という語りは、手付かずの秘境時代へのノスタルジアでありつつ、観光資源としての自然や生態環境の保護・保全の立場であり、また生活侵害としての環境汚染という立場からのクレームとしても捉えることができた。その際に、観光と環境が生活の問題とも関わり、観光の便宜と生活の便宜が錯綜するなかで、環境の喪失が語られていることが指摘できる。次に観光圏と生活圏の地理的・機能的分化による境界は、ホストとゲスト双方のアクターの往来によって乗り越えられ、コンタクトゾーンの状況が発生していた。このことは観光と生活の境界だけでなく、ホストとゲストやローカルとナショナル・グローバルという複数の二分法的発想への違和感へと連結している。

このような、ボラカイ島のフィールドワークからみえてきたシステム間の相互乗り入れや、多様で多元的なアクターの錯綜した立場や関係性から、私たちは生活環境主義の立場が前提とするところの「居住者の生活の便宜」について見直すことができるかもしれない。観光という領域においては、生活や環境の問題が観光と分かち難く結びついており、はたして何をもって「生活の便宜」であると識別できるのか、つねに不安が付きまとう。ボラカイにおける環境の喪失の語りにもみら

れたように、当事者の生活侵害へのクレームは、同時に観光資源としての環境の保護・保全を求める主張と表裏一体である。その不可分性において生活の便宜のみを主張することは、観光化や観光開発への無意識の追従となる危険性をはらんでもいる。さらに、生活の便宜を求める居住者という主体すら、観光の現場においては容易に想定することができない。複数のアクターが多様な多角的な立場と関係性において、それぞれの当事者性を複数抱え込んでいるからである。居住者が、あるいはホストが、さらにはローカルが当事者であるという素朴なアクター観は、もはや妥当性を有していないのである。

それでは、生活環境主義が掲げる「居住者の生活の便宜」とは、すでに意味と有効性を失った前提なのであろうか。いや、私はそうは思わない。いくらかの変更と修正を要しながら、生活環境主義の立場は、観光文化へのアプローチにおいて相変わらず有効であると考えられる。その変更と修正の具体案を示すためには、さらなる調査研究の蓄積を要するため、現段階では以下に粗いスケッチを示しておくにとどめておく。それは、第一に生活は無批判に至高の領域として位置づけるのではなく、観光や環境などその他の領域とつねに乗り入れた緊張関係において理解すること。そして第二に、当事者の範囲を居住者から当該地域の観光に関わるアクター全員にまで一度拡張した上で、それぞれのアクターがどのような当事者性を有しているのか、いかなる立場で観光と関わっているのか、観光化や観光開発によってどの程度の受益者や受苦者であるのか、微細なアセスメントを行うことである。言うに容易く、実践ははるかに困難であるが、再帰的近代において観光という領域で生成・創出する、様々な矛盾や葛藤を含みこんだ新たな事象や現象に対応する理論的視座を打ち出すために、必要不可欠な作業だといえよう。

謝辞

本稿の研究の一部は、平成20年度財団法人宮崎学術振興財団助成金を受け実施したものである。またフィールドワークは、ボラカイ島の多くの方々の協力によって可能になった。ここに記して、関係各位に謝意を表したい。ありがとうございました。

注

¹ フィールドワークは2007年8月から9月、2007年12月から2008年1月、2008年5月、2008年8月から9月の計4回実施した。

² 橋本はさらに簡潔に「観光の現場で人々が出会う文化」[橋本 1999: 3] としている。

³ ここでいう州はProvince、町はMunicipality、村はBarangayというフィリピンの行政区分をそれぞれ訳したものである。なお、マライ町全体は、ボラカイ島の3村を含め17の村で構成されている。

⁴ 正確には、ビーチロードとメインロードともに端から端までではなく、ホワイトビーチにある旧船着場のStation 1からStation 3までの間の距離に限定している。

参考文献

古川彰・松田素二

2003 「観光と環境の社会理論—新コミュニズムへ」古川彰・松田素二(編)『観光と環境の社会学』新曜社, pp. 211-239

橋本和也

1999 『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社

橋本和也・佐藤幸男(編)

2003 『観光開発と文化—南からの問いかけ』世界思想社

Magos, A.P.

1994 The Concept of Mari-it in Panaynon Maritime Worldview. *Fishers of the Visayas: Visayas Maritime anthropological Studies*, Ushijima, I. & C.N.Zayas (ed.), pp.305-355, University of the Philippine Press

松田素二

1989 「必然から便宜へ—生活環境主義の認識論」鳥越皓之(編)『環境問題の社会理論—生活環境主義の立場から』御茶の水書房, pp. 93-132

山下晋司

1999 『バリー—観光人類学のレッスン』東京大学出版会

山下晋司(編)

2007 『観光文化学』新曜社

